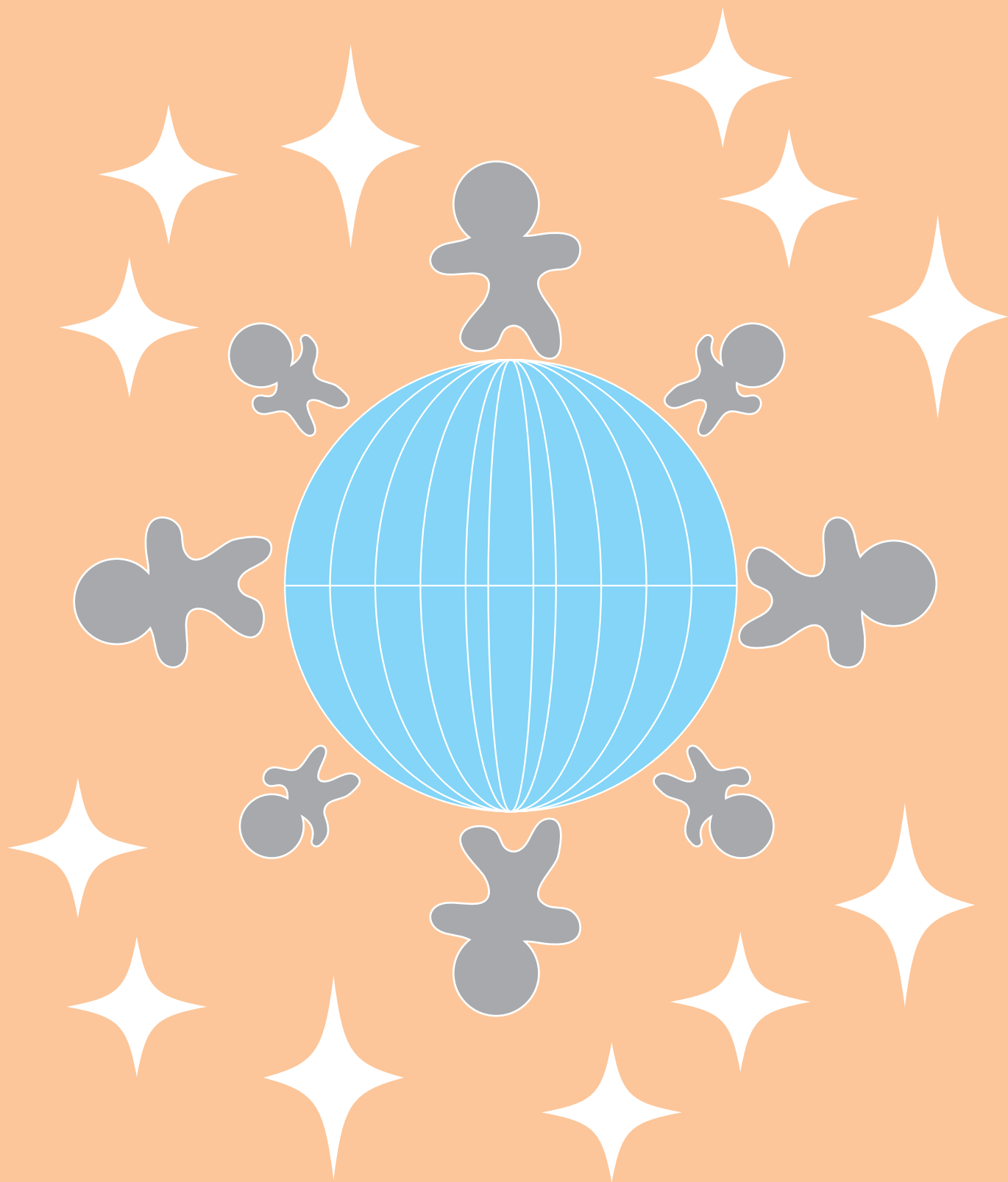


にれのき

October
2006

<http://elm.m78.com/>



みんなで話し合うほど、 やりたいことが増えていく

「まさかプログラムを自分たちで話し合って
決めるなんて想像もつかなかった」

「話し合いでは自分の意見を言えてよかった」



今年は200を超えるキャンプでやりたいことのアイデアが出され、白熱した話し合いが続きました。

06年のエルム小学部キャンプが無事に終わりました。
今年も子どもたちの話し合いをもとに、ゼロからみんなで行くキャンプを進めていきました。子どもたちは「楽しい」話し合いをおして、仲間の前で自分の意見を表明する心地よさとともに、仲間の言葉に耳を傾けるなかで仲間とつながる心地よさを強く実感します。そして、自分と仲間、みんなで話し合っ
てプログラムを決めたんだという強い自負心が、みんなで行くキャンプへの期待感をより大きく膨らまし、大きな喜びと自

信につながっていきます。
今年ほとんどの子がエルムのキャンプに初めての参加でした。話し合いからキャンプ本番まで初めて経験することの連続でしたが、子どもたちの言葉に表れているように、充実感や満足感あふれるキャンプとなりました。
今回の「にれのき」では、参加した子どもたちや保護者の感想文から、今年のキャンプの様子をお届けしたいと思います。

初めてのキャンプ

藤城 真樹(小5)

「私は、初めてのエルムキャンプでたくさん遊びました。川で、みんなとうきわにのって流されたり、ヌルヌルするマスをつかんで焼いて食べたり、とっても楽しかったです。ドラム缶ぶろは最高に気持ちよかったですし、みんなでキャンプファイヤーのまわりでおどったのも熱かったけどうまくおどれなし、みんなの出しもの、クイズやお笑いや芸もとってもおもしろかったですし、自分たちの発表もみんなでやったから楽しかったです。

それに、選択の時間で作ったハンモックは、3時間もかかって作るのほものすごく大変だけど、ムードメーカーの萌々がみんなを笑わせてくれたから、つかれなんかふっとんで、明るく楽に作れました。ハンモックに寝たら気持ちよかったですし、自由研究で出したら、「すばらしいー！」って先生に言われました。

初めてで、ドキドキだったけど、自分たちで考えて作るキャンプだからとっても楽しかったです。また来てみたいです。エルムのキャンプはとっても楽しくて、自分のやりたいことができて、すごく満足、満足、大満足でした」



最後のキャンプになる6年生は、6年生企画として「竜の仕かけ花火」を行うことになりました。4,5年生が帰ったあと、話し合いと花火の下絵書きの作業を続けました。

「わたしにもこんなすごいハンモックが作れるんだと思った」



「ハンモック作りで、いちばん大変だったのは、編むところです。一段一段同じ大きさにしなきゃいけないのでとても大変でした。2～3時間かかって十段編んだので、できたときはとても達成感がありました。ハンモックに乗ったら、下から風が入って気持ちよかったです」
窪田 知芽（小5）



このハンモックは小林由真くん（小3）の作品です。

「みんなで決めた選択の時間のハンモック作りとくなくない作り。どっちもやりたかったから、すごい悩んだよ」

「自分で作ったこのくなくない、今もこれからも大事にしていきたい」

「くなくないをまさかクギで作るなんて想像もしなかったです。クギを炭火の中に入れて、オレンジ色っぽいや赤色になって、最初は怖かったけどだんだん慣れていきました。トンカチでたたいて地道にうすくしていく作業でしたが、僕は短気で、そういう作業は苦手でした。でも、それを千回もくりかえし、やっとこさ、くなくないが完成しました。自画自賛ですが、ものすごくできが良かったです」
高橋 周平（小5）



このくなくないは山田佳果さん（小5）の作品です。



キャンプに参加したお母さんの目

中條 智子さん

「胸がキュンとしてしまいました」

小6次女と一緒に小学部キャンプへ初参加。中3長女と中2長男も中高合同合宿へ参加。

この夏の「エルム小学部キャンプ」の参加を、私とても楽しみにしていました。現在中2の兄がいつも「とても楽しかった」と言っていたからです。私はどんなキャンプなのかを見たくて仕方ありませんでした。今年キャンプに参加する妹が小6なので、これを逃したら後が無い!と思い、ボランティアとして参加しました。

初日の思い出と言えば、カミナリで夕食の時間に停電になってしまったことです。それもキャンプ場だけでなく、村全体が停電!!山中の停電はそれはそれはまっ暗。そこで東京から持ってきた車2台が子どもたちが集まっているバンガローの前に移動し、ライトを点灯!!この夜、車のライトだけで晩ごはんを食べたのでした。そして初日恒例のはじめのつどいの前にパチリ!と電気がつき、キャンプ場に灯りが戻ってきました。なんだか停電がはじめのつどいを盛り上げるためのイベント?と思えるような出来事になってしまったのですから不思議です。

復活した流しそうめん。うずらの卵、カップゼリー、缶詰のフルーツなど「あり得ない!!」ものがどんどん流されましました。

最終日の夜のキャンプファイヤーもシトシト降る雨中、子どもたちがこの日のために夏休みに入ってからずっと話し合ってきた出し物を披露し、教員もそれに応えるように「あり得ない!!」(紙面では面白すぎて書けない)楽しい出し物を見せてくださいました。

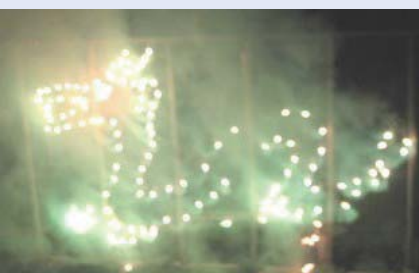
学校の教員は、子どもたちの成長に欠かせないもの。一番に「夏のキャンプ・合宿」をいつも挙げておられます。エルムに通ってくる子どもたちは、みんなが元氣はつらつの子ばかりではありません。悩みを抱えて元氣を失っている子どもたちもいます。そんな子どもたちは、エルムの教員とクラスメイトが悩みを共有してくれるので、心を安定させることができます。親も

初日の思い出と言えば、カミナリで夕食の時間に停電になってしまったことです。それもキャンプ場だけでなく、村全体が停電!!山中の停電はそれはそれはまっ暗。そこで東京から持ってきた車2台が子どもたちが集まっているバンガローの前に移動し、ライトを点灯!!この夜、車のライトだけで晩ごはんを食べたのでした。そして初日恒例のはじめのつどいの前にパチリ!と電気がつき、キャンプ場に灯りが戻ってきました。なんだか停電がはじめのつどいを盛り上げるためのイベント?と思えるような出来事になってしまったのですから不思議です。

初日からカミナリが鳴るようなキャンプでしたから、翌日以降も驚きの連続でした。吐く息が白い中行われた川遊び。倉茂先生が巨体を張って川への飛込みを見せてくれた後に、小さな男の子たちが何人もチャレンジしていきました。絶対怖いだろうに、彼らはこの体験で自信をつけたなと、胸がキュンとしてしまいました。

雨のため中止にしたけど、子どもたちの要望が強くて復活した流しそうめん。うずらの卵、カップゼリー、缶詰のフルーツなど「あり得ない!!」ものがどんどん流されましました。

エルムの教員は、子どもたちの成長に欠かせないもの。一番に「夏のキャンプ・合宿」をいつも挙げておられます。エルムに通ってくる子どもたちは、みんなが元氣はつらつの子ばかりではありません。悩みを抱えて元氣を失っている子どもたちもいます。そんな子どもたちは、エルムの教員とクラスメイトが悩みを共有してくれるので、心を安定させることができます。親も



6年生が企画した「竜の仕かけ花火」

そしてキャンプ成功のために一番の責任を任されていた6年生たちの出し物は、河原に置かれた畳5枚ほどの大きさの「竜の仕かけ花火」でした。その姿が現れたときは、もうグッときてしまいました。

この夏、ダイナミックでドラマティックな取り組みに巻き込まれた私ですが、多くの方に参加してほしいと思いました。

進化し続ける夏合宿「演劇」実践

近年、大きな進化を遂げた合宿の平和劇。その進化の要因を考える。

エルムアカデミーの中学部

合宿（のちに中高合同合宿、以下合宿とする）は、1984年のエルム創立の年の夏が第一回目になります。今年で22回目の開催となりました。合宿は第一回目から「団結」と「平和」を大きなテーマに掲げ、それを具体化する行事として団（中1から中3の縦割りのグループ）ごとに取り組む「スポーツ大会」と「平和発表会―平和劇」



子どもたちを感動させる教員劇。新任教員が好演。

という二つの柱があります。

ここ数年「平和劇」においては、脚本や演技などに取り組む子どもたちの姿勢に大きな変化が生まれています。中学校で取り組まれていた演劇と比べても、質的には高いものができているようです。このような変化を遂げている子どもたちの心の中にはまだ十分には分析ができていませんが、変化を生み出した要因について記していきます。

高校生の合宿参加

2000年から、合宿は中学部と高校部合同でおこなうようになりました。高校1・2年生も団を作り、劇に参加します。高校生はもちろんオリジナルで脚本をつくり、中学生とは明らかに違う高いレベルの演劇を生み出してきました。

した。それを見て演劇の素晴らしさに中学生たちは感動しました。あのような劇をつくりたいというあこがれが、劇のレベルを引き上げていきました。

教員劇の上演

第3回合宿からおこなってきた教員劇（オリジナル脚本）は、数年前より子どもたちの本番前日に発表するようになりました。「子どもたちを感動で泣かせよう」「素晴らしい劇をつくれれば子どもたちも素晴らしい劇をつくる」……この合い言葉で教員たちは、合宿が始まると連日深夜2時間の練習を重ねていきます。毎年、新任教員が主役を務めます。子どもたちは劇の内容とともに、教員の演技の迫力や一生懸命さに感動し、翌日の本番に挑んでいきます。

子ども自身の脚本創作

この5年間で脚本が教員の創作や原作の脚色などから、中学生自身が書いた完全オリジナルの脚本に変わってきています。その内容は広い意味での「平和」がテーマで、いわゆる戦争ものからいじめ・不登校などの学校もの、エイズ・ドラッグなどの社会問題まで様々です。その制作過程はとて大変なものです。だからこそ、仲間や先輩が書いた作品を素晴らしい劇として完成させたいという思いが子どもたちを突き動かしています。大きな感動を生み出します。なお、子どもたちのオリジナル脚本の制作過程については、次頁の特集をお読みください。



今年の立会系列（中学生）のオリジナル劇「バルカン星人の侵略」のワンシーン。

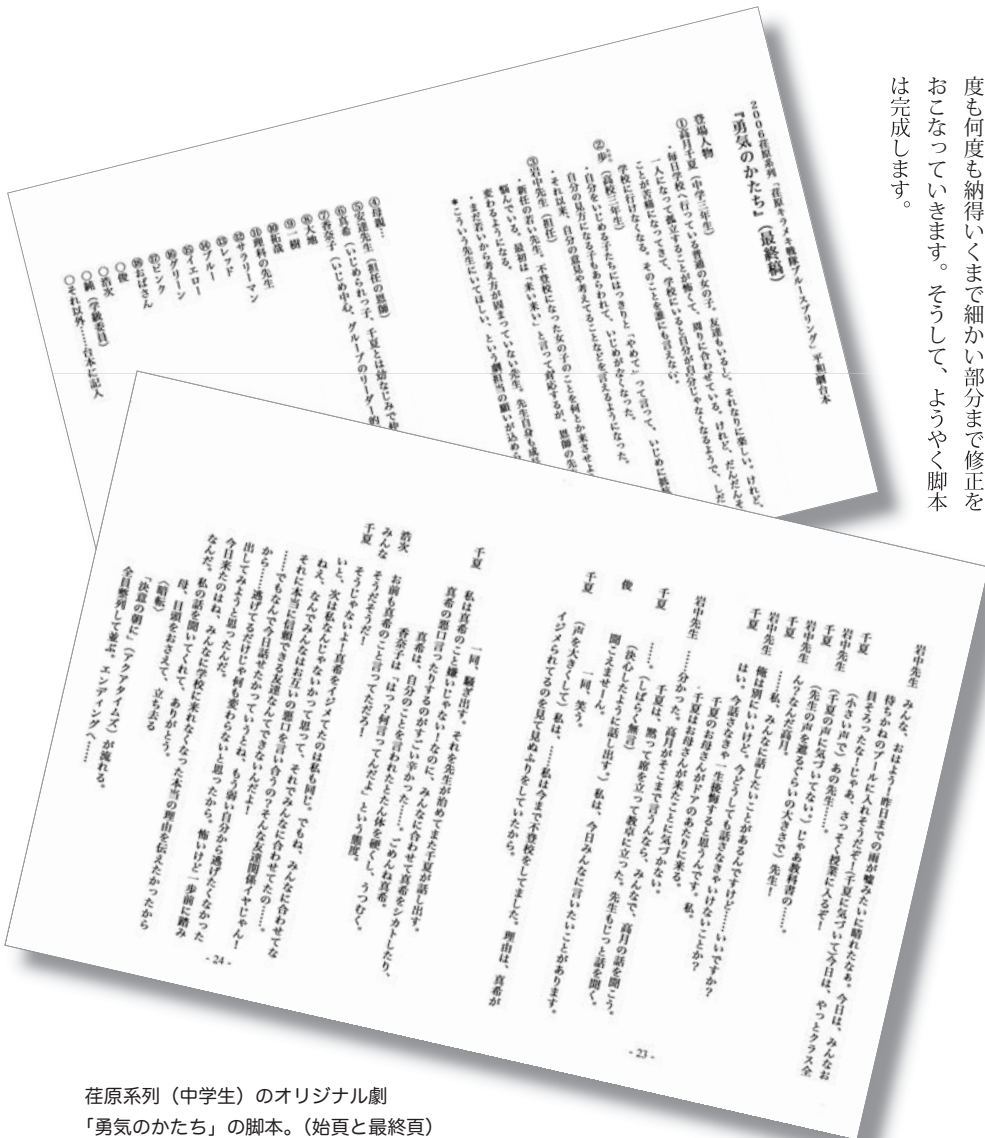
以上思い浮かべられた三点を記しました。これ以外にも小学部から積み上げられた「話し合い」実践やさまざまな場での発表の取り組みなどが、要因として考えられます。今後、子どもたちの心の変化の分析をさらにおこない、今までの子どもたちの劇作品なども含めて、教育実践としてまとめて発表していきたいと思っています。

③

脚本を作る

ストーリーの骨格ができあがると、次に各場面、どのようなセリフややりとりをみんな考えていきます。それが終わるとようやく脚本作りです。各場面ごとに担当を決め、脚本を書き進めていきます。そして、それぞれの脚本は全員でたまたぎ合います。「セリフが設定と合っていない」「このセリフは説明っぽい」など何度も何度も納得いくまで細かい部分まで修正をおこなっていきます。そうして、ようやく脚本は完成します。

子どもたちは、約4日間かけてオリジナル脚本「勇気のかたち」を書き上げました。セリフの修正作業は現地でもおこなわれ、特に主人公がクラスメイトに向かって叫ぶ最後のセリフは、本番前日まで修正を続けていました。納得いく劇を目指した最終稿は「第五稿」でした。



荏原系列（中学生）のオリジナル劇「勇気のかたち」の脚本。（始頁と最終頁）

劇当日の日記から

涙が止まらなかつた……

中條 友里（3A劇担当）

今日は劇一色だった。すごい不安だったけど、やりきったらほんと充実してた。（略）最後に円陣組んだとき、泣く気はぜんぜんなかったけど、かけ声を言ったら泣けてきちゃって涙が止まらなくて、泣いてたらななちゃんがいきなり抱きついてきて一緒に泣いた。そのあと教員とかいってるんな人が声をかけてくれた。高校生の劇が始まるとき、まだ泣いてたらマルが「大丈夫？」と言ってくれて、「泣きやまない」と高校生の劇見れないよ」といってる声かけしてくれたのがすごいうれしかった。

劇は、台本はすごい時間がかかって、さらに劇担4人みんなの思いが詰まるから練習する時間がたりないって思ってたんだけど、でもみんなが頑張ってくれたおかげで最高の劇ができたから、ほんとうれしー！

今日この団は解散だけど、最後に超いいものができたから、この団でほんと良かったって思ってるし、あたしはみんなに支えられてたから、あたしも頑張ることができた。ほんとにほんとに、ありがとう。



特別支援教育への理解と参画を進めるために
第1回公開セミナー開催 講師：上野一彦先生

2006年9月22日(金) ●
きゅりあん

教育サポートセンター NIRE は、9月22日(金) きゅりあん大会議室にて、講師に上野一彦先生(日本LD学会会長、東京学芸大学教授)をお招きし、LDやADHD、アスペルガー症候群など、特別な教育的ニーズを持つ子どもたちについて考える公開セミナーを開催しました。当日は保護者や教員、保育士、学生など幅広い層から、会場いっぱいとなる約80名の参加があり、熱気あふれるセミナーとなりました。上野先生からは、来年度から本格実施される予定の特別支援教育の理念や新しい制度、そして特別な教育的ニーズを持つ子どもたちをどのように理解し対応していけばよいのか、わかりやすくお話していただきました。



図や表をつかって分かりやすくお話していただきました。

支援についての関心は非常に高いということを実感しました。セミナーの参加者や今回参加することができなかった方々からも、今回のような機会をつくっていくことについて、多くの期待がよせられています。教育サポートセンター NIRE では、身近に相談できる地域に根ざした NPO 法人として、今後も継続的に公開セミナーを開催し、子どもたちの理解と支援を広げていきたいと思っています。

いっそう充実した NIRE の活動を進めるために
オラクルボランティア基金・NHK わかば基金からの助成金決定



キャンプでは、普段はすることのできない体験をたくさん楽しみました。写真はオリエンテーリング。

設立して一年足らずですが、活動理念と実績が評価され、今年度もいくつかの助成金等の支援を得ることができました。7月には、2年連続で「公益信託オラクル有志の会ボランティア基金」より助成金10万円が決定し、夏のキャンプでサポートしてもらったボランティアの経費等に充てさせていただきました。また10月には、NHK厚生文化事業団「わかば基金」より、DAISY(デジタル録音図書)教材製作のためのパソコン等購入に50万5千円の

ご支援をいただくことになりました。DAISYとは、もともと視覚障害者のために開発された技術が応用されたもので、読み書きが困難なディスプレイシアというLD(学習障害)の子どもたちに、パソコンを使って教科書や本などが読めるよう支援していきたいと計画しています。また、今回の事業については、NHK厚生文化事業団からも注目され、東京都唯一の受賞となりました。今後ますますな機関と連携し、いっそう充実した活動をつくっていききたいと思えます。



10/11(水)NHK放送センターにて贈呈式がありました。この模様は夕方のニュースで放映されました。